

【交換理論】 [英] exchange theory

両当事者の間で財が双方向にやりとりされる場合を、通常〈交換* exchange〉という。それに対し、財の移転が一方で、(少なくとも短期的に) 反対給付のない場合が〈贈与* gift〉である。人間の経済活動は交換の過程そのものであるが、より広く人間の営む社会・文化現象全般を交換とみなすことも可能である。交換を中心に社会現象を考察しようとする理論的な立場を〈交換理論〉という。交換理論は、とくに20世紀の半ば以降に発展をみた。これには大別して、社会学的交換理論、行動科学的交換理論、人類学的交換理論の3つの系統がある。これらを順に説明するが、その前にまず正統な、近代経済学*との関連について、簡単に触れておこう。

近代資本制社会は、商品交換を基軸にして営まれる。人間個体はめいめい、労働力その他の経済財を所有する権利の主体であって、それらの財(商品)を市場で交換しながら生活する。この資本制社会の驚くべき特質を最初に明確な形のモデルに提示したのは、A. スミスの『諸国民の富』(1776)であった。彼に始まる経済学は、市場での交換関係を理論モデルの中心にすえ、その分析をより精緻なものにしてきた。D. リカード、L. ワルラス、J. ヒックス、P. サミュエルソン、G. デブリューらを経て、それは今日一応の完成をみている。また、J. フォン・ノイマンとO. モルゲンシュテルンの『ゲームの理論と経済行動』(1953)に始まるゲームの理論*は、对人的な状況での交渉を通じた交換と完全競争市場における交換との関係を明らかにする一方、経済財の授受以外の活動も交換モデルで処理しうることを示し、交換理論の発展に少なからぬ刺激になった。

さて、社会学的交換理論の主唱者 P. M. ブラウの『交換と権力』(1964)は、経済学の交換モデル(とくに消費者行動の理論)を社会関係一般に大々的に適用した、野心的な試みである。彼は、上役による知識の提供、それに対する部下の感謝などの社会的行為のやりとりを、社会財の交換と読みかえ、組織内部の過程を一種の市場にみたてて分析を試みた。上役や部下はおのおの効用関数に相当する目的関数をそなえており、それに従って合理的に各自の行動を選択する。これによれば、権力の行使も、上役の欲する反対給付をもたない部下による賞賛(承認)の効果として理解すべきだ、とされる。ブラウのこの試みに対しては、しかし、議論が論理一貫していない、組織内部の過程の解釈が妥当でない、権力*の出現を説明できないなど、さまざまな疑問・批判も提出されている。

つぎに、行動科学的交換理論を唱えたのは、G. C. ホーマンズの『社会行為』(1961)である。ホーマンズは、心理学者 B. F. スキナーの行動主義的ア

プローチを社会的行為の分析に生かそうと考え、心理学が単一主体をもっぱら観察するのにかえて二者関係モデルを提案した。すなわちそこでは、2人の個体が相互に関係していて、一方の個体の行為(反応)は他方の個体にとってサンクション(利得もしくは損害)であり、逆も同様になっている。そのうえで、両者が交わす行為の系列を一連の交換過程とみなすことができる、と彼は考えた。このような個体の行動(基本的社会行動)から、もっと複雑な社会行動を説明していくことができるだろうと構想したわけだが、必ずしも成功したとは評価されていない。基本的社会行動にとって与件である社会構造がどこからやってくるのか、説明がつかない議論になっている、などの難点もあげられている。ホーマンズが社会構造の要因を、独立に交換のモデルに織りこんでいなかったことは、母方交叉イトコ婚の選好をめぐる人類学的交換論者 D. M. シュナイダーとの論争からも明らかである。論争の経緯は、R. ニーダムの『構造と感情』(1962)にくわしい。

以上2つの交換理論が、各人の行為に焦点を合わせた個体主義的な接近なのに対し、人類学的交換理論は集合主義的な接近をとる。この理論は、フランスの人類学者M. モースの『贈与論』(1925)をさがしげとする。デュルケーム学派の重鎮モースは、未開社会において贈与がきわめて大きな宗教的・文化的・象徴的意義を有することを洞察した。彼の著作からも影響を受け、レヴィ=ストロースは『親族の基本構造』(1949)で、物財や象徴財のみならず女性も交換されると大胆にも主張し、単純社会に広く見いだされる親族現象を、女性の交換を主題とするシステムの諸相と理解する道を開いた。このシステムには大別して限定交換、一般交換の2つのタイプの基本構造があるが、その事実は当事者である原住民にも自覚されていない。この議論は、近親相姦禁忌の普遍性や母方交叉イトコ婚の選好などを明快に説明するため、今日人類学の定説に加えられている。彼はつづけて、物財、言語、女性を交換するシステムとして人間社会を理解する、コミュニケーションの一般理論なるものを構想した。そして、現代社会の交換システムにも分析の手をのばそうとしたようだが、これは不首尾に終わっている。人類学的交換理論を近代社会の理解にどう役立てればよいかは、今後の問題である。

なお、人類学の視角から経済学を再構築する試みとして、経済人類学*がある。K. ボランニーの先駆的な業績が広く紹介されて以来、わが国でもこれに関心が集まっている。このアプローチがすぐさま、資本制社会の交換メカニズムの核心をつくとは考えられないが、交換を鍵概念として、経済の周辺領域を考察し、その成果からひるがえって経済学を行詰りを突破しようとする試みには、十分現代的な意義を認めうるのではないかと思う。(橋爪大三郎)

点もあげられている。ホーマンズは社会構造の要因を、独立に交換のモデルに織りこんでいなかった。それは彼が、人類学者D. M. シュナイダーと組んで、レヴィ=ストロースに論争を仕かけたことから明らかである。論争の経緯は、R. ニーダムの『構造と感情』(1962)にくわしい。

らも構造主義社会学の陣営に数えている。一方レマートは、フーコーの業績を精力的に紹介しつつ、新たな社会理論の可能性を探っている。フーコーは、クリステヴァ、ドゥルーズ/ガタリ、デリダ、リオターラとともに、今日ポスト構造主義と目されるが、ロシーはこれらを源泉とする潮流も広く構造主義社会学に含まれるとする。

レヴィ=ストロースをはじめとするフランス構造主義の業績は、パーソンズ、G.C. ホーマンズ、S.N. アイゼンシュタットら〈正統〉社会学者により熱心に検討されたが、より若い世代の社会学者がこの潮流をどのように育てていくかは、ロシーの言うように、今後が開かれた課題である。(橋爪大三郎)

構造主義社会学 [英] structural sociology

フランス構造主義に触発されておこりつつある、アメリカを中心とする社会学の新潮流。構造人類学*や構造主義言語学の業績を基盤にして、あるいはその延長上に展開しようとする多様な社会学的議論の総称。I. ロシー、E. レマートらが中心人物と目される。

アメリカでフランス構造主義の影響が表面化するの、ようやく1970年代になってからである。それまでは、L. ブルームフィールドのアメリカ構造言語学*、T. パーソンズらの構造=機能分析、A.R. ラドクリフ=ブラウンの機能主義人類学など、異なる学統が大きな勢力を占めてきたが、E. リーチ、M. グラスなどの理解者を経由して、徐々に浸透する。ロシーはレヴィ=ストロースの仕事に目を開かれ、社会学への応用可能性を模索する。『構造主義社会学』(1982)のなかで彼は、ソシュール、レヴィ=ストロース、R. バルト、ラカン、アルチュセール、フーコーらに加え、ピアジェやチョムスキー

親族の基本構造 [仏] les structures élémentaires de la parenté 未開社会の親族システムの背後に見いだされる構造。フランスの構造人類学者レヴィ=ストロースがこれを発見した。彼の初期の主著『親族の基本構造』(1949)によれば、親族システムの存在理由は女性の交換にあり、それを実現するために婚姻規則がある。これには大別して2種類があり、一つは双数の集団が女性を互いに交換しあう場合(A⇄B)の婚姻(両方交叉イトコ婚)を規定するもの、もう一つはいくつかの集団が女性を順ぐりに交換する場合(A→B→C→……→A)の婚姻(母方交叉イトコ婚)を規定するもの。前者は限定交換、後者は一般交換と呼ばれる交換システムを形成する。いわゆる未開社会の親族現象について、それ以前は断片的な理解が得られているにすぎなかったが、レヴィ=ストロースは既存の資料を大胆に整理し、ソシュール以来の言語学にヒントを得た持ち前の構造主義*的手法によって、インセスト・タブー(近親婚の禁止)の普遍性や父方/母方イトコ婚の非対称性などから、以上2つの構造を抽出することができた。この構造の対立は、いわば無意識のレベルにあるとされ、その社会的分類体系

記号学的社会学 [英] semiological sociology

記号学*の研究手法に範をとった社会学の試み。今日までのところ必ずしも明確な一学派を形成しているわけではない。

F. de ソシュール、C.S. パースといった記号学の先駆者の仕事が発見され、記号学が一つの研究分野として確立するのは、1960年代以降のことである。記号学が扱うのは社会の広範な文化現象だから、当然、社会学の対象領域と重複する。そこに記号学の研究手法を社会学が採用する根拠がある。記号学以前にも、言語や記号に注目しながら社会生活の諸側面を考察する社会学者が少なくなかった。G.H. ミードの社会理論、T. パーソンズの行為の準拠枠、

や世界像とも結びついている。とくにオーストラリアの部族の婚姻規則が抽象代数学という群の構造と同型だという事実が指摘されたのは、大きな驚きであった。このような構造人類学*の成功は、人類学のみならず、文学、哲学、歴史学等々の分野に大きな影響を与えたが、「より複雑な伝統社会の親族については必ずしも分析が及ばない」など、英米系の機能主義人類学からは批判的な声も聞かれた。しかし今日、この業績は、誰でも踏まえなければならない人間科学の共通財産になっている。→交換理論 (橋爪大三郎)

象徴的相互作用論*, E. ゴフマンの演劇的アプローチ、エスノメソドロジー*などがそうである。これらは記号学の方法を自覚的に採用しているわけではないけれども、広義に考えるなら記号学的社会学の先駆形態と理解できるであろう。

記号学を中心に社会理論を構想する場合の問題点は、記号と対極的な現象、例えば権力にどのように接近するか、であろう。記号学は、二項対立の想定、変換の設定と構造の抽出など、意味現象の形式的分析を特徴とする。しかし社会過程は、形式に還元できない事実(物質性)をそなえているのではないか。M. フーコーはこの点の自覚に立って彼のいわゆる言説分析を実行し、言説領域に外から作用する権力をも実証できるとした。この考古学のアイディアは80年代に、C. テーラー、W. コノリーらアメリカの政治学者に引き継がれ、ホットな論争をまきおこしつつある。日本でも浅田彰らのニューアカデミズム以降、記号学的社会学の可能性が若い世代の社会学者の関心の一つの焦点となっており、すでに多様な試みが重ねられてきている。どのような展開がみられるか今後が注目されよう。

(橋爪大三郎)